琉球諸語と古代日本語からみる祖語の指示体系試論

衣畑智秀
tkinuhata[at]cis.fukuoka-u.ac.jp　※[at] を@に変更してください

福岡大学

フィールドと文献から見る日琉諸語の系統と歴史
於国立国語研究所
2018 年 12 月 22 日

1 はじめに
2 琉球諸方言の指示詞の系列
3 宮古諸方言の指示詞の用法
4 歴史変化についての考察
5 古代日本語の指示体系
6 おわりに：祖語の指示体系

「文法」の再構

- 「文法」の再構とは可能か、また、それはどのようにして可能か？
- 「音韻」の再構
  1. 音韻対応による音の区別とその対応
     - ★ u-u: kusa-kusa(草), usi-ʔusi(牛), ju-'juu(湯)　古代日本-首里
     - ★ o-u：koto-kutu(事), mono-munu(物), oto-utu(音),　古代日本-首里
  2. 変化の性質・効率性

  3. 再構される音韻体系の自然さ

✍ 「文法」の再構にも体系的性質が必要。

指示形態素の形態的対応

- 日本語と琉球語

	古代	中世以降
日本語	ko/so/ka-	ko/so/a-
琉球語	ku/u/ka- 南琉球	ku/u/a- 北琉球

  - 琉球/ku/は日本語/ko/に音韻対応
    例）蛸：taku（首里）、taku（宮古伊良部）
  - 琉球/ka, a/はそれぞれ日本語/ka, a/に音韻対応
    例）風：kazi（宮古伊良部）、雨：ami（首里）
  - 琉球/u/と日本語/so/は音韻対応しない（内間 1984, 柴田 1980）
    三系列体系で近称・遠称以外に現れるという消極的な対応

☞ 体系の中での張り合い関係を見るには、意味の体系を見る必要がある。

1 はじめに

2 琉球諸方言の指示詞の系列

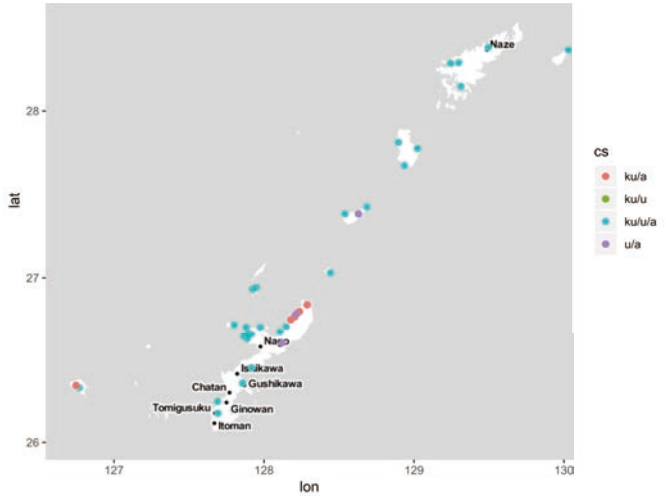
3 宮古諸方言の指示詞の用法

4 歴史変化についての考察

5 古代日本語の指示体系

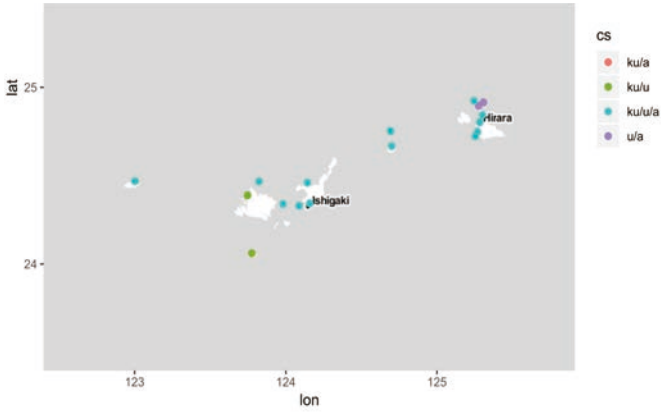
6 おわりに：祖語の指示体系

北琉球



ku/a-…国頭村奥、辺野喜、佐手、与那、辺土名、久米島町鳥島
u/a-…和泊町玉城、国頭村謝敷、東村有銘　　内間 (1984) より

南琉球



u/ka…宮古狩俣、大神
ku/u…西表、波照間　　内間 (1984) より

三系列体系と二系列体系の分布から

- 三系列の指示詞を持つ方言は、奄美から与那国まで広く分布している。

✍ 琉球祖語は、形態的に*ko/*o/*ka-の三系列の指示詞を持っていた。

- 全 53 地点中 13 地点（約 4 分の 1）で二系列しか指示詞を持たない方言が存在する。
- 二系列の指示体系も、沖永良部、沖縄北部、久米島、宮古、西表、波照間と離れた地域に点在する。

☞ なぜ離れた地域に二系列指示体系が点在しているのか？

内間 (1984) の解釈

- 三系列が揃う方言も、意味的には二つの系列が対立する。

  o 系の語は甲種では *ko* 系と対立を示さず、乙種では *a* 系と対立を示さないということである。... 琉球方言のほとんどは甲種・乙種のどちらかであるといえよう。(*p. 67*)

- 元々二つの系列が対立する関係の中に、ku-, u-, ka-が入ってきた。

  かつて琉球方言の中へ、*ko* 系・*o* 系・*a* 系の三語系が入ってきた。三語形は入ってきたが、そこに住んでいる人の意識は、... 一元的自他二極構造であった。そのために、現在では、はりあい関係にない語形どうしの中では、そのどちらか一方が失われる場合もあるものと解される。(*p. 71*)

1 はじめに

2 琉球諸方言の指示詞の系列

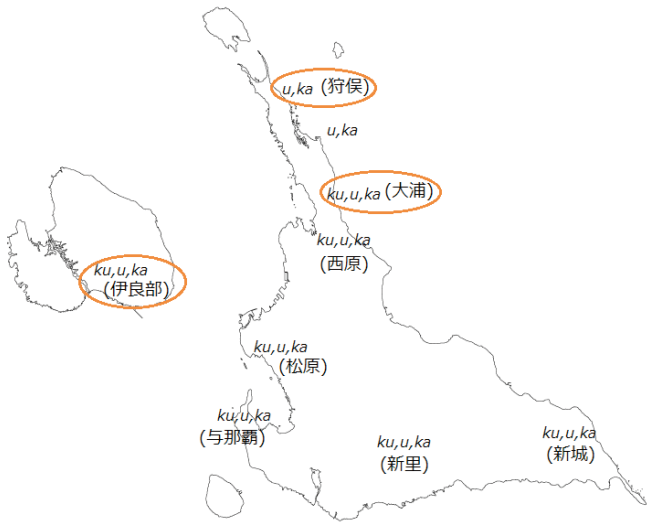
3 宮古諸方言の指示詞の用法

4 歴史変化についての考察

5 古代日本語の指示体系

6 おわりに：祖語の指示体系

宮古諸方言の指示形態素



狩俣方言：二系列指示体系

- 現場指示

場所	話し手	聞き手	対話者以外
単一	u-	u-	ka-
比較	u-	u/ka-	ka-

- 文脈指示 (衣畑 2017: KF_{33})

	遠実在				近実在				非実在			
共有	u-	ka-	ka-	ka-	ka-	ka-	u-	u-	–	–	–	–
話者	ka-	ka-	ka-	ka-	ka/u-	u-	u-	u-	ka-	ka-	ka-	ka-
聴者	ka-	ka-	ka-	ka-	u-	ka/u-	ka-	u-	ka-	ka-	ka-	ka-

✍ 直示であれ、照応であれ、近称 u-と遠称 ka-が使い分けられている。

大浦方言：似非三系列指示体系

- 現場指示（Kinuhata and Hayashi 2018: 話者 OF_{28}）

場所	話し手	聞き手	対話者以外
単一	(k)u-	(k)u-	ka-
比較	(k)u-	(k)u/ka-	ka-

- 文脈指示

	遠実在				近実在				非実在			
共有	ka-	ka-	ka-	ka-	ka/ku-	ka-	ku-	ku-	–	–	–	–
話者	ka-	ka-	ka-	ka-	ka-	ka-	ku-	ku-	ka-	ka-	ka-	ka-
聴者	ka-	ka-	ka-	ka-	ka-	ka-	(k)u-	(k)u-	ka-	ka-	ka-	ka-

✍ 直示であれ、照応であれ、近称 (k)u-と遠称 ka-が使い分けられている。

伊良部方言：三系列指示体系

- 現場指示

場所	話し手	聞き手	対話者以外
単一	ku-	ku/u-†	ka-
比較	ku-	ku/u(/ka)-†	ka-

† 話し手に近ければ ku-、遠ければ u-。(ka-) は話者によって可能。

- 文脈指示（話者 IM_{30}）

	遠実在				近実在				非実在			
共有	ka/u-	u-	u-	u-	u-	u-	u-	u-	–	–	–	–
話者	u-	u-	u-	u-	u-	u-	u-	u-	ka/u-	u-	u-	u-
聴者	u-	u-	u-	u-	u-	u-	u-	u-	u-	u-	u-	u-

✍ 直示では ku-、u-、ka-が人称もしくは距離で使い分けられる。

✍ 照応には、もっぱら u-が使われる。

狩俣・大浦・伊良部方言の観察から

- 二系列指示体系（＝似非三系列）

	現場	文脈
近	u(ku)-	u(ku)-
遠	ka-	ka-

- 三系列指示体系

	現場	文脈
近	ku-	u-
中	u-	
遠	ka-	

- 現場指示で u-と ka-が近・遠で対立している。
- 現場指示の対立が、そのまま文脈指示に持ち込まれている。
- 現場指示で u-と ka-は近・遠の対立ではない。
- よって、文脈指示で u-と ka-が近・遠で対立することはない。
- 文脈指示はもっぱら u-が使われる。

1 はじめに
2 琉球諸方言の指示詞の系列
3 宮古諸方言の指示詞の用法
4 歴史変化についての考察
5 古代日本語の指示体系
6 おわりに：祖語の指示体系

宮古諸方言について

- 狩俣タイプから伊良部タイプへの変化は起こりうるか？
  → 否：ku-は日琉祖語に*ko-として遡る形。
- 伊良部タイプから狩俣タイプへの変化は起こりうるか？
  想定しなければならない変化
  1. 現場指示の ku-と u-の合流
  2. ku-の文脈指示への進出、u-との合流
  3. 近・遠の対立にもとづく文脈指示用法の役割分担
  4. ku-の脱落

①

	現場	文脈
近	ku,u-	u-
遠	ka-	

②

	現場	文脈
近	ku,u-	ku,u-
遠	ka-	

③（大浦）

	現場	文脈
近	ku,u-	ku,u-
遠	ka-	ka-

④（狩俣）

	現場	文脈
近	u-	u-
遠	ka-	ka-

☞ そもそもなぜ①が起こったのか？

三系列から二系列への変化は起こるか？

- u-の意味変化？
  - （現場指示の）u-が意味的に ku-に近い、とは言えない。
    - ★ ku-と u-が合流：和泊町玉城、国頭村謝敷、東村有銘、宮古狩俣、大神
    - ★ u-と ka-が合流：西表、波照間
- 三系列から二系列への体系的推移？

  [I]t has been claimed that the size of a deictic system decreases "as the degree to which the spatial environment is man-made increases" ...: the deictic systems of many aboriginal languages are much more complex than the deictic systems of languages that are spoken by people in modern societies. (Diessel 1999: 160)
  It does seem that there is some sort of inverse correlation between size of demonstratives system and size of language community. ... At an earlier stage, English had a three-term system (this/here, that/there and yon/yonder) but the third term was lost as English developed into a world language. (Dixon 2003: 107)

  - 琉球諸語・諸方言には当てはまらない。
  - 非隣接地域で二系列への変化が発生する不自然さ。

形態的三系列と意味的二系対立

- 議論の整理
  - 宮古祖語（琉球祖語）は形態的に三つの形態があるが、
  - 意味的には二系列を好むような体系である。
- 提案：**現場指示二系列**仮説（Kinuhata and Hayashi 2018）
  - 残りの一つの形態は、文脈指示専用（いわゆる照応詞）。
  - 自然な仮定としては、*ko-、*ka-が現場指示、*u-が文脈指示。

祖体系

	現場	文脈
近	ku-	u-
遠	ka-	

⇗ 伊良部: u-の現場指示獲得

	現場	文脈
近	ku-	u-
中	u-	
遠	ka-	

⇘ ku-と u-の合流

	現場	文脈
近	ku- u-	ku- u-
遠	ka-	

⇒ 大浦: 類推による拡張

	現場	文脈
近	ku- u-	ku- u-
遠	ka-	ka-

⇒ 狩俣: ku-の脱落

	現場	文脈
近	u-	u-
遠	ka-	ka-

琉球諸方言への変化のパターン

- 琉球諸方言へ起こった変化：u-系列の現場指示用法の獲得
- 指示体系のバリエーション：現場指示における u-系列の受け入れ方
  1. u-が ku-と合流：ku/ka-もしくは u/ka-の二系列指示体系
     例）和泊町玉城、宮古狩俣など
  2. u-が ka-と合流：ku/ka-もしくは ku/u-の二系列指示体系
     例）西表、波照間など
  3. u-が独自の指示領域を獲得：ku/u/ka-の三系列指示体系
     例）宮古伊良部、新里
  4. u-が ku-と混用：見かけ ku/u/ka-の三系列指示体系
     例）北琉球の諸方言 ???
  5. u-が ka-と混用：見かけ ku/u/ka-の三系列指示体系
     例）南琉球の諸方言 ???

cf. 荻野 (2009)、下地 (2003)、下地 (2018)

1 はじめに
2 琉球諸方言の指示詞の系列
3 宮古諸方言の指示詞の用法
4 歴史変化についての考察
5 古代日本語の指示体系
6 おわりに：祖語の指示体系

古代日本語の指示形態素

- 上代日本語に見られる三系列
  - コ系列
    - (1) 山人の朕に得しめし山づとそこれ（許礼）（万葉 4293）
    - (2) この（己乃）方に我は立ちて（万葉 3299）
  - ソ系列
    - (3) それ（其）をだに君が形見に見つつ偲はむ（万葉 1276）
    - (4) その（曽能）月逢はむもの故（万葉 3586）
  - カ系列
    - (5) 我が思ふ君がみ舟かもかれ（加礼）（万葉 4045）
    - (6) かの（可能）児ろと寝ずやなりなむ（万葉 3565）

コ系列

- 現場指示・近称
  - (7) あしひきの山行きしかば山人の朕に得しめし山づとそこれ（許礼）（万葉 4293） コレ
  - (8) 旅にして妹に恋ふればほととぎす我が住む里にこよ（許欲）鳴き渡る（万葉 3783） コ
  - (9) こもりくの泊瀬の川のをち方に妹らは立たしこの方に（己乃加多尓）我は立ちて（万葉 3299） コ
  - (10) 天ざかる鄙にしあればそこここも（彼所此間毛）同じ心そ（万葉 4189） ココ
  - (11) 日下部のこちの山（許知能夜麻）と畳薦平群の山のこちごちの山の峡に立ち栄ゆる葉広熊白樫（古事記 90） コチ

「感覚可能な領域に存在するすべての対象を指示しうる。... 表現主体が現に知覚しつつある対象でさえあれば、主体との遠近・親疎にかかわりなしに指示機能を果すものと見られる。」（橋本 1982: 235）

カ系列

- 現場指示・遠称
  - (12) 沖辺より満ち来る潮のいや増しに我が思ふ君がみ舟かもかれ（加礼）（万葉 4045） カレ
  - (13) かの（可能）児ろと寝ずやなりなむはだすすき宇良野の山に月片寄るも（万葉 3565） カ
  - (14) 暁のかはたれ（加波多例）時に島陰を漕ぎにし舟のたづき知らずも（万葉 4384） カ
  - (15) a. 誰そかれと（誰彼）我をな問ひそ（万葉 2240）
    b. 誰そかれと（誰彼登）問はば答へむ（万葉 2545）

「近称や中称の指示語の尨大な用例数に対する遠称系の絶対的な少なさに、こうした問題点を重ね合わせてみれば遠称の未発達は事実として疑う余地がない。」（橋本 1963: 4）

cf. 山田 (1954)、李 (2002)、岡崎 (2010)

ソ系列

- 文脈指示・不確定指示

(16) 池の辺の小槻が下の篠な刈りそねそれをだに（其谷）君が形見に見つつ偲はむ（万葉 1276） ソレ

(17) 植ゑし田も蒔きし畠も朝ごとに凋み枯れ行くそを（曽乎）見れば心を痛み（万葉 4122） ソ

(18) 我が故に思ひな痩せそ秋風の吹かむその月（曽能都奇）逢はむもの故（万葉 3586） ソ

(19) 山の峡そことも（曽許登母）見えず一昨日も昨日も今日も雪の降れれば（万葉 3924） ソコ

「ソが聞手の領域を指示するという今日の中称の特色を示す例はまず皆無である。... 話手が現実の場において感覚しうるものをコ、現在の感覚を絶した観念的対象をソで指示するという二元的対立が指示語の原初的な体系として考えられはしないか。ソが文脈指示に片寄る理由もこの方向から解決できそうである。」（橋本 1963: 7）

カ系列未発達説について

1. 「未発達」とはどういう意味か？
   - ＝「用法が狭い」？
     「こちごち」（213）「をちこち」（4154）「をてもこのも」（4013）
   - ＝「（元々）遠称カは存在しなかった」？
2. 現場（可視）／観念（不可視）の対立？

   Jarawara has a two-term system with a contrast between "here, visible" and "here/there, not visible". (Dixon 2003: 91)
   In Supyire ... there is a single form (marked for gender and number) which is, presumably, used to translate all instance of this and of that... (Dixon 2003: 81)
3. 文体的問題

   「古今集以下の八代集に基づいて指示語の表を作成してみても、上代の場合とそれほど大きな異なりがない。」（橋本 *1982: 234*）
   「指示代名詞では「こ」「これ」「おれ（それ）」「なお・なおう（何）」「づれ（どれ）」などがある。遠称の代名詞らしき「あれ」が *3* 例あるが、感動詞である可能性が強い」（高橋 *1997: 426*）

ソ系列の現場指示用法の獲得

- 中古〜中世

(20) うちわたす遠方人にもの申すわれそのそこに白く咲けるは何の花ぞも（古今 1007）

(21) [女は] せめて暗き方に入りたまへば、われ（＝兼雅）も奥へ入りたまひぬ。〔兼雅 → 子]「あこはそこに。眠たからむ」とて（うつほ 1103）

(22) [僧正 → 上人]「そこは貴き上人にておはす。」（宇治拾遺下 142）

(23) （義仲が牛車に上手に乗れずにいる）[牛飼 → 義仲]「それに候手がたにとりつかせ給へ」（覚一本平家 2.128）

藤本 (2008) より

1. はじめに
2. 琉球諸方言の指示詞の系列
3. 宮古諸方言の指示詞の用法
4. 歴史変化についての考察
5. 古代日本語の指示体系
6. おわりに：祖語の指示体系

- 宮古語の二系列と三系列の指示体系を派生させるには、現場二系列・文脈一系列の体系を考える必要がある。
- その場合、ku-と ka-が現場指示、u-が文脈指示を担ったという想定が自然である。
- 奄美語、沖縄語（北部）、八重山語でも二系列と三系列の指示体系が見られ、それぞれの祖語が同様の体系であったと想定できる。
- 古代日本語も現場の近称に ko-、遠称に ka-、文脈指示に so-が使われる体系であった可能性が高い。
- よって、日琉祖語に現場二系列（*ko-/*ka-）、文脈一系列（*o-もしくは*so-）の体系が再構できる可能性がある。
- 課題としては
  - 形態の齟齬：so と u の対応／ ka と a の関係
  - 琉球語史のどの段階で*o が現場指示へ侵入していったか

References I

Diessel, Holger (1999) *Demonstratives: Form, function, and grammaticalization*: John Benjamins Publishing Company.

Dixon, R. M. W. (2003) “Demonstratives,” *Studies in Language*, Vol. 27, No. 1, pp. 61-112.

Kinuhata, Tomohide and Yuka Hayashi (2018) “On the anaphoric use of demonstratives in Miyakoan,” in Shin Fukuda, Mary Kim and Mee-Jeong Park eds. *Japanese/Korean Linguistics 25*: CSLI.

内間直仁 (1984) 『琉球方言文法の研究』，笠間書院.

岡崎友子 (2010) 『日本語指示詞の歴史的研究』，ひつじ書房.

荻野千紗子 (2009) 「琉球八重山地方の指示詞について」,『中村学園大学・中村学園大学短期大学部研究紀要』，第 41 巻，17-24 頁.

柴田武 (1980) 「沖縄宮古語の語彙体系 10」,『月刊言語』9-11，大修館書店，104-107 頁.

橋本四郎 (1982) 「指示語の史的展開」,『講座日本語学 2 文法史』，明治書院，217-240 頁.『橋本四郎論文集　国語学編』（角川書店、1986）に再録.

藤本真理子 (2008) 「ソ系列指示詞による聞き手領域の形成」,『語文』90，大阪大学国語国文学会，40-53 頁.

山田孝雄 (1954) 『奈良朝文法史』，宝文館.

衣畑智秀 (2017) 「宮古狩俣方言における指示詞使用の個人差」,『福岡大学研究推進部論集 A: 人文科学編』，第 17(4) 巻，45-50 頁.

References II

下地賀代子 (2003) 「多良間方言の代名詞」，村岡英裕（編）『日中両言語における代名詞及び親族語彙の対照研究; 琉球方言との比較研究も含めて』，千葉大学大学院社会文化科学研究科.

下地理則 (2018) 『シリーズ記述文法 南琉球宮古語伊良部島方言』，くろしお出版.

橋本四郎 (1963) 「万葉の「彼」」,『女子大国文』，第 28 巻，1-13 頁.（京都女子大学）.

高橋俊三 (1997) 『言語学大辞典セレクション日本列島の言語』，第古典琉球語章，422-431 頁，三省堂.

李長波 (2002) 『日本語指示体系の歴史』，京都大学学術出版会，京都.